

Think the Earth Paper

シンク シアース ペーパー

Think the Earth Paper vol.18

Autumn-Winter 2025

SDGs16

平和をあきらめない教育を

戦後80年を迎えた広島で開催したティーチャーズ・ギャザリング。

教員たちが被爆者の声に耳を傾け、未来への問いを語り合いました。

平和を“教える”のではなく、“共に考える”ために。その場で生まれた想いや言葉をお届けします。

ガザやウクライナの映像を見ると、
破壊された街で逃げ惑う母子の姿に、
自分の体験を重ね合わせます。
もし核兵器が再び使われれば、
今度は地球全体が全滅するでしょう。

田中聰司（広島県被団協）

悲惨さを知って終わりではなく、
「自分には何ができるか」を
考えられる教育を大切にしてほしい。

伊藤未唯（高校生）

教師としてできるのは、知る機会を与えること。
機会さえあれば、子どもたちは自分で調べ、
こちらの想像もしないようなことまで
考えるようになります。

岡川陽介（被爆体験伝承者研修生、小学校教諭）

人の命に国境はない。国籍に関係なく、
一人の人間が一人の人間に寄り添う優しさ、
ヒューマニティが大事。

関根健次（ユナイテッドピープル代表）

対話で大切なのは「言い合う」ではなく
「聞き合う」こと。
「はい・いいえ」で終わらない良い問い合わせがあると、
平和への対話は成り立ちます。

安彦里香（ハチドリ舎店主）

本気で平和について考え、
すべての人が健康で幸せに暮らし、
地球を守っていく方法を考えること。
その営み自体が「平和文化」なのです。

スティーブ・リーパー（元広島平和文化センター理事長）

核時代80年。 ノーベル平和賞が示した、人類への警鐘

1945年8月6日、1歳5ヶ月のときに広島市で被爆した、日本原水爆被害者団体協議会(日本被団協)代表理事の田中聰司さん。

原爆被害から80年が経った今、改めて核時代の危うさと、平和を守り抜くために私たちが考えるべきことを語ってくれました。

構成：中村茉莉花

母に背負われ、 原爆投下直後の広島へ

私は若い方の被爆者で、1歳5ヶ月の時に被爆をしまして、今年81歳になります。みなさん、よく「今年は被爆80年」「戦後80年」といふ方をされます。私はあえて「核時代80年」という言葉を意識的に使っています。核兵器がこの地球上に登場し、広島、長崎に原爆が落とされて私たちが被害を受けて以来、80年ずっと人類は核の時代を生きてきました。みなさんも私も、共通して核兵器に運命を握られている。その認識を共有しながら話を聞いていただければと思います。

私は1944年、山口県で生まれました。父も母も広島の出身です。父は軍人で、原爆投下の前年、すでに戦局が激しくなっていた中国で銃弾を受けて大けがをし、山口の陸軍基地に戻され、療養しながら軍務に就いていました。

ある日、「新型爆弾で広島が全滅した」という情報が軍に入りました。翌朝すぐ、衣料品や食料を積んだ救援トラックが、軍隊から広島へ向けて出発しました。母の実家は爆心地から約900メートルの広瀬北町にあったため、母は幼い私を背中に縛りつけ、軍のトラックに乗り込み軍人たちと広島に向かって進んでいきました。

トラックは山陽線を通り、下関から岩国を経由して、西広島から広島市内に入りました。爆心地から2キロほど手前に差しかかると、あたり一面、すでに全滅状態でした。ほとんどの建物は焼け落ち、道もない。軍人たちちは死体や動物の死骸をどけながら、がれきの中に道をつくり、少しずつ爆心地の方向へと進んでいきました。

母の実家のすぐそばに、広瀬神社という神

社があるのですが、その神社の石の鳥居だけがかろうじて残っており、それを目印に母は実家の跡を探し当てました。たどり着くまで、ほぼ丸一日かかったといいます。実家は跡形もなく、家族がどうなったのかまったく見当もつきませんでした。母は数日間、野宿しながら周辺を探し続けました。そのうち、「このあたりの人たちは古市の国民学校(現・広島市立古市小学校)に避難したらしい」という情報を聞きつけた母は、ようやく国民学校で両親や兄弟たちに会えうことができました。教室も廊下も、身を横たえる人、うずくまる人……大勢の怪我人で埋め尽くされていたそうです。

長女だった母の両親と、兄弟6人がそこにおり、母は懸命に手当をしましたが、間もなく両親と弟、妹の4人が亡くなりました。遺体は校庭の隅に次々に山積みにされ、石油をかけて焼かれました。異様なにおいと泣き声、うめき声の中で、母と私はしばらく生活を続けました。

生き残ったのは、母の弟妹のうち2人だけでした。さらに、母のすぐ下の妹は行方がわからなくなっています。母は朝になると爆心地の方へ出かけ、日が暮れるまで歩き回って妹を探しました。もちろん、当時は子どもを預けるところなどありませんから、私をずっと背負いながらです。日暮れまで探しても妹が見つかないと、母は再び実家跡に戻り、軍から支給されたわずかな食料を掘り出しては、古市の国民学校に運んで残った家族の世話を続けました。そんな生活を続けるうちに、やがて日本は終戦を迎えました。結局、私の親族は、父方・母方あわせて15人が被爆し、そのうち11人が亡くなりました。母の妹はいまだ行方不明のままでです。

原爆は人類絶滅の警鐘だった

戦後の暮らしは厳しく、子どものころはいつもお腹が空いてひもじい思いをしていました。戦後間もなく、広島駅の周辺には、食料品から衣類まで様々なものを売る闇市があちこちに並びました。小学校帰り、友達数人で出かけていっては、瀬戸内海の小魚を干した乾物などを盗んで河原まで逃げて食べたものです。うまいんですよ、あれは。ところが夜になって激しい腹痛に襲われ、母に「どこで何食べたのか正直に言いなさい。言わないとお父さんに言いつけて、病院にも連れていきませんよ」と問い合わせられた。だけど、軍人の父に知られたら猛烈に怒られるのがわかっているから、本当のことを言えませんでした。痛みに耐えながら夜が明けたことを、今になってよく思い出します。

当時は配給制で物資が統制されていましたが、配給だけではとても食糧が足りず、違法の闇市に頼らなければ生きていけなかった。闇市を拒んで正直に暮らした裁判所の判事が餓死したというニュースが出たほど、ひどい食料難の時代だったのです。

みなさんも、国連児童基金(UNICEF)のテレビコマーシャルを見かけることがあるでしょう。難民の子どもたちの姿が映され、この子らのために薬を送りましょうなんて募金を呼びかけるものです。あの姿は、かつての私たちでした。戦後すぐに国連が発足し、第二次世界大戦の被害を受けた子どもたちへの緊急支援を目的としてUNICEFが設立されて、いち早く支援を受けたのは日本の子どもたちだったのです。私たちはUNICEFから無償で提供された脱脂粉乳を学校給食で飲んで育ちました。私たちは、「見られる側」にいたんです。あの支えがあったから、自分は今まで生き延びてこられた。感謝しています。

今、ガザやウクライナの映像を見ると、破壊された街で逃げ惑う母子の姿に、私は自分の体験を重ね合わせます。もし核兵器が再び使われれば、今度は部分的な被害では済まない。地球全体が全滅する時代になるでしょう。

ここで、改めて原爆被害について私なりに整理したいと思います。原爆被害というのは、

単なる戦争被害でも一時的な災害でもありません。普通の天災や人災と決定的に違うのは、永続性、遺伝性があり、被爆者本人だけでなく次の世代にもわたって被害が続いていること。さらに日本の2都市に落とされた原爆は、人間だけでなく、生物や生態系もすべて破壊し、まさに20世紀最大の環境破壊をもたらしました。広島の町は、建物などのハード面も、人の暮らしや文化、伝統などのソフト面も、そして地域社会のすべてが失われた。原爆は、人間が人間らしく生きることさえ否定するのです。広島や長崎は、このままでは人類が滅ぶるという縮図であり、警鐘だったのだと思います。1947年の第1回平和式典で、当時の広島市長であった浜井信三さんが述べた、「原子力をもって争う世界戦争は人類の破滅と文明の終末を意味するという真実を世界の人々に明白に認識せしめた」という人類の全滅に関する警告と、核兵器廃絶を訴えたメッセージは、80年を経た今、ますます現実味を帯びています。

沈黙の季節を経て、語る決意へ

私は1963年に上京して早稲田大学へ進み、学生寮に入りました。自己紹介で広島出身というと、原爆の時はどうしていたのかと必ず尋ねられます。適当に答えるたびに、自分が被爆者であることをいやおうなく意識させられました。ある日、寮の風呂で隣にいた友人に、「原爆って感染らないんだろ」と言われた私は、激しいショックを受けました。「20年も経って感染するなんておかしいだろう」と彼の無知に驚くとともに、強い差別感を味わった。それから、寮の風呂に入れなくなり、町の銭湯へ通うようになった私は、被爆者であることを見して生活するようになりました。

やがて私は大学を卒業して地元に戻り、中國新聞社の記者になりました。新人の頃から先輩記者について回るうちに、多くの被爆者の声を聞きました。母のお腹の中で被爆した人のことを胎内被爆者と呼びますが、中でも症状の重い人は、頭の発達が遅れて脳や体に重い障害を負う「(原爆) 小頭症」と呼ばれる状態で生まれます。小頭症の人の中には大人になっても知的発達が追いつかず、一人で生活できない人もいます。8月6日が近づくと、そういう子どもを抱えて生活する被爆者の親などを取材するよう命じられるのですが、取材中に胸が詰まってメモが取れないことも何度かありました。

新聞記者として被爆者の取材を続けるうちに、彼らの強い悲しみや怒り、喜びなどを共に感じるようになりました。佐藤栄作首相のノーベル平和賞受賞を批判した記事や、被爆者への援護が不十分なことに疑問を投げかける記事も書きました。やがて、日本被団協初



田中聰司(たなか さとし)
広島県被団協・被爆を語り継ぐ会

山口県下関市生まれ。原爆投下の2日後、1歳5ヶ月のときに、母の実家があった広瀬北町に入り被爆。幼少期から病弱で、50歳を過ぎ、食道がんなど6つのがんの手術を繰り返し、治療中。幼少期に原因不明と言われた口内炎も半世紀たって原爆症と判明。日本原水爆被害者団体協議会代表理事、広島被爆者団体連絡会議事務局長、広島県原爆被害者団体協議会理事、広島市原爆被害者の会副会長、ヒロシマ学研究会世話人など。早大卒。中国新聞社論説委員。「広島新史」「広島市被爆者援護行政史」など執筆。





左上)生まれて間もない頃の田中さん。山口県にある軍隊の官舎で、両親と(写真提供:田中聰司氏) 左下)1968年、駆け出しの新聞記者時代(写真提供:田中聰司氏) 上)1952年ごろ、宮島で、両親と妹・弟と。原爆の翌年生まれた妹は母の胎内で被爆し、同じく戦後に生まれた弟は家族で唯一被爆をしていない「被爆二世」(写真提供:田中聰司氏)

代事務局長だった藤居平一^{*1}さんと出会い、私は多くのことを教わりました。藤居さんは、被爆者を連れて国会で請願活動を行ったり、1955年に初めての原水爆禁止世界大会の開催を広島で実現させたり、その翌年の日本被団協の設立に尽力したりと、さまざまな活動に身を投じた人物です。藤居さんの追悼集を編集・出版したことをきっかけに、私自身も広報誌づくりなどで運動に関わるようになりました。その後も被団協の活動を取り組み、2009年には日本被団協設立50年史の編集を担当しました。

やがて、被爆者の仲間たちが次々に亡くなっていくなかで、生き延びた一人として何かをしなければ、という思いに駆られ、被爆者として語る活動を始めます。運動に深く関わる直接のきっかけとなったのは、1956年の日本被団協結成時の宣言文にあった「自らを救うとともに、体験を通して人類の危機を救おう」という一文との出会いでした。この決意文は「世界へのあいさつ」というタイトルとともに、先人たちが世界に発信した宣言です。まだ援護法^{*2}もなかった当時、生活するのもやっとだった被爆者たちが手弁当で全国から集まり、人類の危機を救うには何をすべきか、白熱した議論を繰り広げていた。その真剣な姿に心を打たれました。被爆者であることを隠してこそ生きてきた自分は、なんと心の狭い人間だったのか。そう反省させられました。この言葉に出会って、大袈裟ですが生きる目標のようなものを見つけ、私は証言活動を始めたのです。

2017年、核兵器禁止条約^{*3}が国連で採択されました。広島・長崎の被爆者をはじめ、世界の市民が積み重ねてきた長年の運動の結果として実現したものでした。しかし、日本政府は、被爆国でありながらこの条約に署名も

批准もしていません。その事実に、私たちは深い失望と悔しさを感じています。

喜び半分、恥ずかしさと情けなさが半分

昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞し、12月にノルウェー・オスロで行われた授賞式に、私も参加しました。被団協設立のために奮闘した、藤居平一さんと森瀧市郎さんの小さな遺影をポケットに入れて。ノーベル委員会のヨルゲン・ワトネ・フリドネス委員長が、「苦難の体験を生かして平和への希望に尽力することを選んだすべての被爆者を称えたい」という趣旨の、素晴らしい演説をされました。

私は「この平和賞はすべての被爆者がもらったものだ」という認識でいます。私たち被爆者は、何かの手柄を立てたわけではない。偉大な発明をして物理学賞をもらったわけでもない。この受賞は、かつてない厳しい核情勢の中で「被爆者の声にもう一度耳を傾けましょう」という、ノーベル委員会から国際社会への呼びかけなのでしょう。

残念ながら、今、世界で核兵器を持つ国は二桁に達しようとしています。人類を何度も滅ぼせるほどの1万2千発を超える核兵器と、私たちは同じ地球で暮らしているのです。核兵器は目に見えない存在ですから、政治家も市民も、そして被爆者自身さえも、危機感を持ち続けることは簡単ではありません。私たちが被爆したときも、日本人はみんな戦争に勝つと信じていて、日本が原爆なんかでやられるとは誰も思っていなかった。けれど、思いもよらないことは起きるんですよ。戦争を体験した人は、昨今の情勢を「あの頃とよく似通ってきている」と言います。時代が悪い方向へ進んでいるのに、その危うさが実感

としてわからない。アメリカのような大国も国連も機能しない今、被爆者の耳にもう一度耳を傾けましょうと、ノーベル平和賞は呼びかけたんです。

授賞式から帰って、マスコミの取材などで受賞の心境を尋ねられるたびに、私は「喜び半分、恥ずかしさと悔しさと情けなさが半分」と答えたものです。この気持ちは今でも変わっていません。もっと強くなっています。ノーベル平和賞が私たちに授与された意義を、日本政府は理解していないからです。それどころか、政治家は被爆者の声に耳を傾けようともしません。

授賞式帰国後の面会でも8月6日の平和式典でも、石破茂首相は核兵器禁止条約について、ただの一言も触れませんでした。私たちが首相に期待しているのは、言葉ではなく政策です。かつて日本は平和国家として、核兵器廃絶と被爆者援護の二つを掲げて世界をリードしてきたのに、国際条約ができた途端に政府はそっぽを向いてしまった。アメリカの「核の傘」に依存しているためとも言われます。防衛は防衛としても、禁止条約はあくまでも「入り口」です。条約に批准したとして、核が明日からパッとなくなるわけではありません。核軍縮を進めるための第一歩にすぎないのに、日本政府はその入り口にさえ近づこうとしない。被爆国でありながら条約に背を向け続ける政府の姿に、私は強い情けなさを感じています。

それでも私たちは声を上げ続けるしかありません。日本政府に禁止条約への参加を求める署名活動を平和記念公園などで重ねています。先月は核保有国であるフランスを訪れ、15ヶ所で被爆体験を伝えました。南東部にあるグルノーブルという町のピオル市長を通して、マクロン大統領あてに要望書も提出しました。核保有国を一堂に集め、核軍縮のテーブルをつくること。そして戦争をやめること。ふたつの要望をしたためた要望書はすでにマクロン大統領の手に渡ったようですが、いま返事はありません。

フランスの科学者たちとの面会では、核兵器を生み出して世の中を危なくしてきたのはあなたたち科学者なのだから、ぜひこれからは平和を実現するための研究、核兵器をなくす研究に力を注いでほしい、と要望しました。これからも私たちは各所で要望を続けるでしょう。

学ぶべきは、身近な平和を大切に人間らしく生きること

世界平和といつても、小学校や中学校で学ぶのならば、まずは身近なところからです。天下国家を語る前に、家庭や学校でお互いを

思いやり、人権を大切にして平和な関係を築くことが大切です。日常の中で他人を傷つけずに人間らしく生きることを実践し、それを周りの社会へ広げていくことから、世界平和は始まるのだと思います。

私にとっての平和は、夕方には帰宅し、妻とささやかな夕食を囲むことです。子ども時代には大家族だったけれど、今では妻と二人暮らしです。何気ない日常が当たり前に続くこと、夕餉のひとときが持てるここと。特別なことではありませんが、それが今の私にとっての一番の幸せです。

みなさんに最後にお伝えしたいのは、まず、それぞれの立場や年代で「核に立ち向かうために何ができるか」という問い合わせに、時々は思いを馳せてほしいということです。忙しさに流され、核兵器の問題を自分の生活とは無関係の問題だと思ってしまう人が多い。でも、そうではないんです。核兵器は人権や差別、飢餓など、あらゆる問題に通じる諸悪の根源であり、これをなくすことこそが、人類の最大かつ緊急の課題です。国会では、禁止条約に日本が参加するためにはどんな環境を整えるべきなのかを、与野党を超えて恒常的に議論すべきです。そして私たち一人ひとりも、私たちの政府を、そして核を持つ国リーダーたちをどう動かしていくのか、真剣に考える時期にきています。のんびりしている余裕はないんだという危機感を持ち、自分には何ができるかを考える人間でいたい。私自身も言い聞かせていますし、みなさんにそうお願いしたいと思います。

***1 藤居平一**
(ふじい へいいち、1915~1996)。広島市出身。原爆で父と妹をなくし、民生委員の立場から私財を投げ打ち被爆者運動の先頭に立つ。広島県被団協・日本被団協の結成に尽力し、日本被団協初代事務局長に就任。國に原爆被害の責任を問い続け、現在の被爆者援護の根幹をつくった。

***2 援護法**
被爆者援護法。「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」として、1994年に制定された。それまでの原爆医療法および原爆特別措置法を一本化し、國の責任において被爆者に対する保健、医療および福祉にわたる総合的な援護対策を実施することなどを定める。

***3 核兵器禁止条約**
TPNW : Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons。核兵器を「非人道兵器」として、その開発・実験・使用・使用の威嚇を国際法のもとで完全に禁止する国際的合意。2017年に国連で採択され、2021年に発効した。



書籍紹介『被爆者からあなたに』日本原爆被害者団体協議会編(岩波書店)



2020年10月、核兵器禁止条約発効の記念集会にて。日本政府の条約への批准を、原爆ドーム前で訴えた(写真提供:田中聰司氏)



2023年8月、若者たちに被爆体験を語る(写真提供:田中聰司氏)



2024年12月、ノーベル賞授賞式にて。日本被団協代表委員の田中熙巳さんによる、核兵器廃絶を訴えるスピーチ(写真提供:田中聰司氏)

平和を自分ごとにできる教育とは？

世界のあちこちで戦火が絶えない今、平和の価値を、どう子どもたちに伝えていけばいいのか——。

「ティーチャーズ・ギャザリング2025 in 広島」2日目の午後に行われたパネルトークでは、

日々頃から平和をテーマに活動する多彩なメンバーが集い、それぞれの現場から“平和をどう学び、どう伝えるか”を語り合いました。

構成：中村茉莉花



「やらされる平和教育」では続かない

小野 今日は平和と教育という難しいテーマですが、平和も教育も、本来は楽しいもののはず。なので、楽しい雰囲気で進めていかなければと思っています。まずは高校生の伊藤未唯さんに口火を切ってもらい、みなさんと話し合いたいことを提言してもらいましょう。

伊藤 ありがとうございます。広島市立舟入高校3年の伊藤と申します。今日は教員の方が多いと思うので、「生徒が平和について自分ごととして考えられる教育とは何か？」と一緒に考えてほしいと思います。

まず考へてもらいたいのは、みなさんにとつての平和とは何かということ。おそらく簡単ではありませんよね。私たちも平和を多角的に探究していく「平和探究班」の活動で1年間探究しましたが、結論は出ず、「人それぞ違うのでは」というところに落ち着きました。みなさんにとっての平和教育とはどんなものか、ぜひ考へてみてください。

小野 まず会場の教員の方に聞いてみましょうか。

教員（埼玉） 自分自身が平和学習というものを学校で受けたことがなかったので、「紛争や戦争を起こさないことを教えるもの」だと思っていました。でも今回、広島で学ぶうちに、高校生の一人が口にした、「平和教育を大人からさせられているけれど、本当の理由をちゃんと考へたことがない」という言葉にモヤモヤして……まだ答えが出ていません。

伊藤 正直、私も「やらされている感」を感じたことがあります。広島では平和教育が原



安彦恵里香(あひこえりか)
Social Book Cafe ハチドリ舎 店主

1978年茨城県生まれ、広島市在住17年。建築不動産の仕事を経て、24歳で国際NGOピースボートが主催する船旅に参加、スタッフとなり、環境、非核化などの社会問題解決に取り組むように。2011年核兵器について考えるアートブック「NOW！」を制作・発刊。2017年7月「社会とつながること」がテーマのSocial Book Cafeハチドリ舎をオープン。カクワカ広島発起人、投票所はあっちプロジェクト運営、ジェンダーを考えるひろしま県民有志発起人、ひろしまのシッピングプライドを考える会メンバー。前NHK中国地方放送番組審議委員長。著書に『ハチドリ舎のつくりかた～ソーシャルブックカフェのある街へ～』

爆教育に偏りがちで、戦争の悲惨さは学んでも、「なぜ戦争はいけないのか」「どうしたらなくせるのか」と考える機会が少ないんです。県外のみなさんには、同じ過ちを繰り返してほしくない。悲惨さを知って終わりではなく、「自分には何ができるか」を考えられる教育を大切にしてほしいです。

小野 外から広島にやってきて、平和運動に関わっている安彦さんにもご意見を伺いましょう。

安彦 広島でソーシャルブックカフェ「ハチドリ舎」を運営しています。学生がよく店に来るのですが、みなさんすごく真面目でまっすぐで、「私たちも何か平和のためにしなきゃいけない。どうしたらいいですか？」なんて聞いてきます。でも、そこで「何かしたいのは、どうして？」と聞くとなかなか理由を答えられない。それは、やっぱり「やらされてるから」だと思うんです。「広島に生まれたから、被害を学んで伝えなきゃいけない」というパッケージングされた学びがあって、その背景には「言われたからやってます。卒業したら終わりです」という世界があるんじゃないかなと。そこで私は「いいことをしなきゃいけない、という考え方自体があなた自身

を抑圧するのであれば、やらなくてもいいのでは？」という問いかけをするんです。やらなきゃいけないことって続かないし、「何のためにやってるのか」という理由が、それの中にあった方がいいなと思うんですよね。

戦争はヘイトスピーチから始まる

小野 核兵器廃絶に向けて頑張る広島の方々もいらっしゃいますよね。

安彦 もちろんです。ただ学校教育の中では、核軍縮について触れるシーンがほとんどない。だから私たちは「カクワカ広島」という団体で、国会議員に「なぜ核兵器禁止条約に署名しないのか」と直接尋ねる活動をしています。政府や国会議員に、日本政府のあり方や姿勢を問う。それはすごく具体的なアクションだと思っています。

広島では、平和というと「原爆の被害」そして「核廃絶」の話がほとんど。世界の紛争、戦争の話をしましたか。自分たちが加害者になった経験の話をしましたか。日本も、朝鮮半島や中国を侵略していて、その時の植民地主義のひどさといったらない。ここを語らずして、戦争の本質は見えてこないと思います。戦争のおぞましさって、自分たちが無理やり人を殺させられるということにあると思うんですが、この点はあまり直視されていません。

「ホロコーストはガス室から始まったのではなく、はるか以前にヘイトスピーチから始まった」という、元国連ジェノサイド防止担当特別顧問のアダマ・ディエンさんという方の印象的なスピーチがあります。戦争は、ヘイトスピーチから始まる。言葉は人を殺すんです。最近の日本では、政治家までがヘイトを口にする。恐ろしいことです。日本は平和ですね、なんてことを言う人がいますが、自殺者が2万人を超える社会のどこが平和なのでしょうか。

小野 関根さんと岡川さんにもご意見を聞いてみましょうか。

関根 広島の平和教育にちょっとフラストレーションがあるというお話をしたが、でもや

っぱりすごく大切な教育であって、全国にも広がってほしいと願っています。重要なのは、安彦さんがおしゃったように、もうちょっとレイヤーを深めて多角的に考えること。たとえば、核不拡散条約で一部の国だけが核を持てるのはなぜか、といった昨今の情勢に合わせた議論も大切です。

「なぜ平和が必要なのか」というそもそも問い合わせにいえば、戦争は痛いものだから。人が人を殺すというリアリティは自然災害とは違って、「仕方ない」では済まされません。親が子どもを目の前で殺されるようなことが二度とないようにしなければいけない。心で、体で平和の大切さを感じることが大切です。

僕は映画を通じて様々な社会問題を伝える活動をしています。水や食料、土壤、心の豊かさなど、様々な問題が実は平和につながっています。だから8月だけ平和教育をすればいいとも思わないし、日本だけが平和になればいいわけでもない。過去の教訓を現在につなぎ、未来の平和のためにバトンを渡していくためにも、映像、人の体験というのは今に生かすことができると思うんですね。

もうひとつ、平和とは「人への優しさ」だと思っています。「あっち側」の世界にも人間が住んでいて、自分たちと同じような家庭



関根健次(せきね けんじ)
ユナイテッドビープル株式会社 代表取締役／
一般社団法人国際平和映像祭 代表理事

ペロイト大学経済学部卒。卒業旅行の途中、偶然訪れた紛争地で世界の現実を知り、後に平和実現が人生のミッションとなる。2002年、世界の課題解決を事業目的とするユナイテッドビープル株式会社を創業。2009年から映画事業を開始。2014年より誰でも社会課題・SDGsテーマの映画上映会を開催できる「cinemo(シネモ)」を運営開始。映画「もったいないキッチン」プロデューサー。2021年9月21日、ビーストにてワイン事業「ユナイテッドビープルワイン」を開業。

Photo Report

DAY 1

残暑の厳しい8月23日～24日に行われたティーチャーズ・ギャザリング2025 in 広島。全国から集まった教員や中高生など約50名が、2日間を通して平和と教育について考へ、話し合いました。



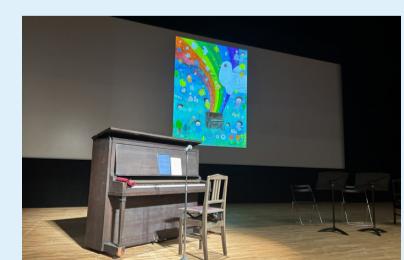
平和教育ファシリテーター黒住 奏さんによるアイスブレイク。テーマは「あなたにとっての平和とは？」。「社会的平和」「心の平和」「自然と共にある平和」、これら全てがあって「完全な平和」があるというユネスコの3つの平和についての解説も



岩田美穂さんのガイドで広島市立本川小学校平和資料館を見学。爆心に最も近い学校だった



高校生ユースピースボランティアのガイドで平和記念公園の遺構を訪ねる



夜は地元大学生による被爆ピアノ演奏会を開催。学生がつくった音楽付き朗読作品「二十歳になつたら」が上演された

に夢を持った子どもたちがいて、そういう人たちが傷つくような戦争はない方がいい。そんな関心や想像力を持ってもらうことに教育の意味がある。私たちは今年、戦後80年という年を迎えてますが、世界では常にどこかで戦争がつながっていて、今もずっと「戦中」です。そんな現在起きていることにも、ぜひ目を向けていただきたい。

自分ごと化の力は共感から

関根 舟入高校では、外国の高校生たちとオンラインでつながって、交流していると聞きました。異なる世界とつながって世界を知る、すごく大切な取り組みだと思います。

伊藤 私も所属する「国際コミュニケーションコース」で、1年次に行なっている取り組みです。Zoomでフィリピンやインドネシア、グアテマラの高校生たちと、それぞれの国 文化や課題などをプレゼンし合い、意見交換を行います。自分と同じぐらいの年代の子から話を聞くと、どこか遠い国でのできごとだと思っていたことが「自分ごと化」され、すごく身近に感じられる。平和を考える上で大事なのがこの「自分ごと化」だと思っています。

関根 広島は世界中から人が訪れ、交流できるのが利点ですが、今はオンラインで世界中の教室とつながれる時代です。中学生・高校生のときに、アフリカ大陸も含め地球の反対側とつながれば、遠い世界が身近になる。自分の手元に世界がやってくるような感覚ですよね。そしてその国で自然災害や戦争が起きたら、自分に何かできないかなという発想になってくる。映像を使った交流は体験を立体化し、行動を変容するきっかけになるんです。

ひとつ例を挙げると、2023年10月6日、



伊藤未唯(いとうみい)
広島市立舟入高等学校 平和探究班3年生

広島市出身。小さい頃から曾祖母の被爆体験を聞いて育つ。高校1年生の時に、舟入高校に訪問したガザの中学生と話をしてガザの現実を知り、平和に対して行動していない自分を情けなく思ったことをきっかけに平和活動を始める。舟入高校の平和探究班に所属し、「平和とは何か」を探究する。第11回NPT再検討会議第3回準備委員会に平和首長会議ユースとして派遣され、広島の高校生として平和への想いを発表した。広島ユースピースボランティアとしてのガイド活動を高校2年生から行なっている。

ガザ出身の中学生3人が広島を訪れ、東広島市の武田中学・高校の生徒たちと交流をしたんです。翌7日にハマスがイスラエルを攻撃して戦争が始まり、ガザに帰れなくなってしまった彼ら彼女たちは、現在2人はヨルダン、1人はリビアに避難しています。けれども、引き続き、武田中学・高校の生徒たちがオンラインで、彼らと交流を続けている。

映画にも同じ力があります。ニュースで「どこで戦争があり、58人亡くなった」と聞いても実感が湧かないけれど、映画にひとつの家族が登場して、その誰かが殺されてしまった、となれば、悲しみがストーリーで伝わってきて、共感できる。映画の持つ「感動の力」によって異なる世界同士を近づけ、今この世界に生きている人たちと共に平和をつくれたら、と考えています。

「知る機会」をつくるのが教師の仕事

小野 ここまでこのところをまとめてみると、広島の平和教育には、もっと深めるべき課題もありますが、同時に広めていく意義もある、ということですね。その際の工夫のポイントをいくつか伺いましたが、岡川先生からも何か提案はありますか。

岡川 僕は広島出身で、小中高と広島で育ち、今は大阪で小学校の教員をしています。平和教育はたしかに押し付けの教育だったかもしれません。子どものころは僕もイヤでしたよ、「また原爆の話聞かにやいけんの？あの恐ろしい写真や映画を見にやいけん」と。けれど、一方で「これって本当に知らなきゃいけないことなんだな」とどこかで納得もしていた。

それを実感したのが、広島を出てからです。僕は徳島の大学に行ったんですが、広島を出ると、8月6日も普通の一日なんです。8時15分になんでもみんな何事もなく部活を続けているし、(黙祷) サイレンも鳴らない。教師になって大阪に行き、初めて担任した4年生の子どもたちに、学級会で「8月6日って何の日か知ってる人？」と聞いても、誰も何も知らないんです。クラスで1番元気な男の子が「知ってるよ」と手を挙げて、「ハムの日！」と答えた。広島ではありえないでしょう、でも大阪ではそれが普通なんです。

僕が当たり前と思っていたことが当たり前じゃないんだと気づいて、広島のことをもっと伝えていこうと思いました。知ることが第一歩で、知らなければ関心を持つことさえできません。教師としてできるのは、知る機会を与えること。機会さえあれば、子どもたちは自分で調べ、こちらの想像もしないような



岡川陽介(おかがわ ようすけ)

被爆体験伝承者研修生
大阪府枚方市立川越小学校教員

広島市出身。大阪府の公立小学校に勤務して21年目になる。広島を離れてから、あらためて平和学習の大切さに気づき、子どもたちとともに戦争を学び、平和について考える実践を取り組んでいる。現在は、被爆体験伝承者研修生として梶文昭さんから学んでいる。勤務する大阪では、他校に出向いて子どもたちに平和学習の飛び込み授業や講師として職員研修も行っている。昨年8月6日にはNHK広島『原爆の日・特集 ヒロシマを未来へつなぐ』で自身の実践が紹介された。

ここまで考えるようになります。実際、卒業遠足の行き先を自分たちで決めたとき、子どもたちは「大阪空襲を語り継ぐ資料館」を選びました。広島の勉強をして、平和について関心を持ったんです。学びたいという気持ちが子どもたちの心に自然に芽生えたのは、うれしかったですね。

行動につながる教育とは？

伊藤 「平和とは何か」を考えたとき、私は結局SDGsなのかなと思いました。今年4月、ニューヨークの国連本部で開かれた核兵器不拡散条約(NPT)運用検討会議準備委員会という会議に出席する機会があり、その際、SDGsを推進するUNDPなどの機関を訪れました。SDGsは、「平和を実現するための人類の共通課題」をゴールとして掲げています。一人ひとりが課題解決のために行動しなければ最低限の平和は訪れない。すべての人が持続的に幸せな生活をしていくための指標が、SDGsなのではと感じました。

そして、それを自分ごととして考えられるようにする媒体となるのが、教育だと思います。核兵器や気候変動などはどこかの国のトップだけの問題ではなく、私たち一人ひとりに責任がある。その為政者を選んだのは私たち。気候変動に関しては、行動しないことで加害者になっているかもしれないという意識が必要です。

平和大使になろう、とかそんな大層なことではなくていい。教員のみなさんが担当授業の中で例えば「この原理を生かして、人のためにこんな研究をしている人がいる」と紹介するだけでもいいんです。生徒一人ひとりが、

「自分の得意なことで誰かの役に立つには？」と考え、ワクワクしながら平和のために行動しようと思えるようなきっかけをつくっていただけたらと思います。

小野 「行動につながる教育を」という伊藤さんの思いがしっかり伝わったと思います。どなたか、これに関して何かいいアイデアはありますか。

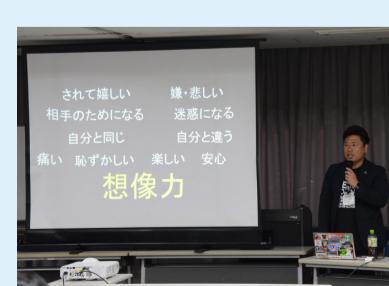
関根 平和教育の出発点をどこに置くかは、人それぞれいいと思います。原爆でもほかのテーマでもいい。大切なのは、誰か一人の人間が、ショックを受けたり、感動したりと強烈な印象を受ける何かに出会うことだと思うんです。心が動くと、行動が変わる。僕は大学でリベラルアーツ教育を受けて、常に問いを立て続ける学びをしてきました。最終的には、世界の現実と自分自身が直面する体験にたどり着きましたが、そうした体験は本や人の話、映画といった疑似体験でも得られる。教育の役割は、興味や関心、「なぜ」と思う気持ちを持つ生徒をどんどん増やすことだと思います。自ら考えて行動を始める生徒を増やすこと。ゴールとしてそれで十分ではないでしょうか。

僕の会社ユナイテッドピープルで扱っている映画のひとつに、ファストファッションの問題を描いた『ザ・トゥルー・コスト』という作品があります。10年以上前ですが、バングラデシュの縫製工場が倒壊し、1,000人以上が一夜にして亡くなった事件がありました。働いても働いても構造的な貧困から抜け出せず、安く・早く・グローバルに服を流通させるために、奴隸のように働かされている人たちがいる。これは平和とは言えないですね。平和とは戦争がないだけでなく、一人ひとりが幸福に生きられる状態だと思います。実はこの映画を高校生のときに見た生徒が大学に入って、製造過程をすべてトレースできるエシカルなファッショントランドを起業したんです。

もうひとつ、タイの事例なんですが、東南アジアに「海の奴隸」と呼ばれる人々がいます。隣国のミャンマーやラオスから働きに来た人が人身取引で漁船に乗せられ、何年も陸に戻



広島の高校生が考案した平和ワークショップ。広島と長崎の高校生が協力して作ったバーチャル構造ツアーや、状況が異なる3つの国のジャーナリストや科学者、政治家などになりきり、核導入の賛否についてディベートするワークを実施



岡川先生による
平和教育のデモ授業



参加者が輪になって行われたパネルトーク

れないまま低賃金または完全無賃金で働かされている。パティマ・タンプチャヤクルさんというタイ人女性は、そうした被害者5,000人を救い、ノーベル平和賞候補になりました。ドキュメンタリー映画『ゴースト・フリート』はこの実態を明らかにしています。日本にもIUU (Illegal, Unreported and Unregulated)漁業と呼ばれる違法・無報告・無規制の漁業で獲られた魚が3~4割入っていると言われます。何も知らなければ、スーパーで魚を買うことで、私たちは知らず知らずのうちに誰かを傷つけてしまっているかもしれない。映画や本などの道具を通して「こんなことが起きているんだ!」と知ることができれば、どこからでも平和教育は始められると思います。

心が動く瞬間をどうつくるか

小野 広島で生まれ育つと、その強烈な印象を受ける最初のトピックが、原爆資料館に行ったり、被爆者の話を聞いたりすることなのかもしれませんね。



安彦 広島では、体験者任せの平和教育になってしまっている面もあると思うんです。で、被爆のつらさを受け取って「もう二度と被害者にならない」という感覚が強い。ただ、人々が今起きている暴力に無自覚になってしまっているのは、第二次世界大戦での責任について、突き詰めて考えてこなかったからだと思うんです。よく「尊い犠牲の上の平和」と言うけれど、「なんで誰かが犠牲にならなきゃ平和にならないの?」と私は腹が立つんです。死んでいい命なんてひとつもない。どの誰でも、今でも昔でも、死んでいい人なんて一人もいなかった。日本は植民地支配で多くのアジアの国々の市民を殺しました。それを反省しなければいけないし、同時にアメリカに対しても原爆投下という国際法違反の責任を問わなければいけない。今この瞬間も、国際法違反や倫理を逸脱した行為は起きている。それに対してもっと強く声を上げなきゃいけないのに、「日本は平和でよかった」で終わって

しまっていないか。どうしたら二度と同じことが繰り返されないか、自分たちが加害者にならないために何ができるのか。かつて、戦争が始まる過程で何が起きたのか、誰がリーダーシップをとって何を言ったのか、どんな無思考が働いていたのかを見直して、今の時代にそれが起きていないかを確かめることが大事だと思います。

小野 もう二度と同じことを繰り返さないように、被爆の方々も、闘ってくれているんですよね。私たちやこれからの世代のために。

関根 伊藤さんと岡川先生に聞いてみたいのですが、僕は「伝える」と「伝わる」の間には大きな違いがあると思っています。伝える手段としてのアイテムや表現は何が適切なのか、受け手にトラウマを受けさせないためにはどこまでの表現がいいのか、どんなふうにお考えですか。

岡川 それは僕も常に意識しているところで、平和学習では、動画や写真、言葉だけなど、年齢に応じて手段を選んでいます。僕は「怖い」と思う感情も大事だと思うんです。僕自身、広島で育ち、幼稚園のときに原爆資料館で蟻人形を見て、みんなで大泣きしたことを見ても忘れられません。夢に出るほど怖かったけど、「怖い」で終わらなかったからこそ、今も平和への思いを持ち続けている。大切なのは、きちんと問い合わせ持たせ、心を動かすこと。僕は小学生には絵本が一番伝わりやすいと感じていて、授業でもよく使っています。心が動いたとき、人はもっと知りたい、伝えたいと思うようになる。そして、心が動くポイントというのは、人の命のぬくもりを感じたとき。人のぬくもりを感じ、ぐっと近くに感じることで、さらに考えを広げて「これから」につなげられるような構成や伝え方を意識しています。

伊藤 広島では小さいころから原爆の被害の歴史を教えられ、悲惨な写真などをどうしても目にする機会がある。その怖さから、平和に触れることを避けてしまう人も多く、それは広島でも問題視されています。今の原爆資料館ではショッキングな展示も多いですが、途中で順路が分かれています。そうした表現を避けることもできます。また、岡川先生がおっしゃっていたように、個人に焦点を当てるることはとても大事だと思います。亡くなった人の数やデータ上の数字では伝わらないことでも、個人のエピソードを取り上げることで感情移入がしやすくなる。恐ろしい映像や写真の表現が苦手な人には、口頭で個人の体験

談を伝えることで、平和を考えてもらうきっかけにできるのではないかでしょうか。

「言い合う」ではなく「聞き合う」

伊藤 平和にとって、大切な「対話」について話したいと思います。対話というのは自分の思いだけを伝えるということではなく、相手を知り、相手の立場に立って考えること。今の国際社会ではそれがどんどんできなくなっていると感じます。今年8月6日の平和記念式典で、湯崎英彦・広島県知事が「核抑止」というのはフィクションである」とスピーチしたように、核抑止や軍事力で成り立つ平和は、対話による平和ではありません。核兵器は小型化・精密化が進み、使うハードルも下がっている。過去には誤って使用されかけた例も何度もあり、軍事力で秩序を保とうとするのは限界があるんです。だから、まずは相手を理解し、対話をすることが平和への第一歩。教員のみなさんには、生徒のみなさんに一番伝えいただきたいです。

安彦 対話で大切なのは「言い合う」ではなく「聞き合う」こと。自分の意見を伝えるのももちろん大切だけれど、なぜその人がそれを伝えようとしているのかを、よく聞くこと。そして、「はい・いいえ」で終わらない問い、たとえば「怖いって何だろう」「仲良くするってどういうことだろう」といった、戦争や対立を考えることにつながるような、良い問い合わせがあると対話は成り立つと思います。

関根 対話で大事なのは相互理解を深めること。また、「誰と」対話するかも重要です。安彦さんが冒頭でおっしゃったように、戦争の被害についてはどの国も教えているし覚えていますが、加害についてはなかつたことにしたいのか、なかなか教えないし、伝わらない。でも、加害と被害、両方の視点を持つことはすごく重要なこと。東アジアの国々の教育者や学生、生徒同士で対話の場を持つことも、オンラインで一瞬にしてつながれる今なら難しくありません。僕は大学時代に中国に留学し、大歓迎と激しいヘイト、二つの体験をしました。激しく罵倒されて囮まれたこともあったんですが、話をしているうちに、「みんなに責められてかわいそだったな、今日から全部おごってやる」と言って何日も食事をおごってくれた人も出てきました。その体験が、人間ってわかり合えるんだな、と感じた僕の原点なんです。大切なのは知ろうとすること。あっち側の人たちは私たちをどう見ているの



か、向こうが受けた被害はどんなものだったのか、そういう問い合わせを持つことから始まると思います。

安彦 私も韓国や中国に行って感じたのですが、日本では8月15日は終戦の日でも、韓国では植民地支配からの解放を祝う日。立場がまったく違うんです。そうした違いを知ってからじゃないとできない対話がありますね。

岡川 平和教育をどう進めたらいいかとよく聞かれますが、まずは自分の中で引っかかった問題を子どもと一緒に考えること。心を動かされた絵本と一緒に読んで感想を語り合うこと。そうした小さなところから始まると思います。僕自身もそういった活動をずっと続けていきたいです。

関根 岡川先生の「平和教育は人のぬくもりが感じられること」という言葉は、本当にその通りだと思いました。私は「人の命に国境はない」と考えています。国籍に関係なく、一人の人間が一人の人間に寄り添うその優しさ、ヒューマニティが大事。おととい出た報告書によると、パレスチナ・ガザ地区では50万人がもうすぐ死ぬかもしれない、という危機的な状況にあります。食料も水も医薬品もなく、病院も破壊され、もう2年間子どもたちは学校に通えていません。人間が人間らしく生きるという当たり前であるはずの権利を奪われた人たちが、今も助けを求めていました。ぜひ時間軸を今日に戻して、今この瞬間、世界で何が起きているかを想像してほしいと思います。

伊藤 私が平和教育に求めることとしてみなさんにお伝えしたことは、少しわがままだったかもしれません。でも、まずはやっぱり「知ること」から始めていただければと思います。そしてあまり重荷に感じず、それぞれの教科の中でできる範囲のことから取り入れてほしいです。押し付けにならないよう、生徒のみなさんに無理なく自分のペースで平和について考え、学びを広げていけるような教育をしていただけたらと思います。本日はこのような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

参加者の声

今まで広島に来たことがなく、夏に平和式典をニュースで見るだけでしたが、今回は地図の上でしか知らないことが、自分の中に少し入ってきた気がします。多くの人と話す中で、「心って人との間で動くんだ」と感じました。中学生たちはいろんな世界への入り口をたくさん見せたい。そのためのヒントをもらえた気がします。



被害を伝えるだけでなく、「どう平和な社会をつくるか」を、原爆を起点として考えたい。対話のキャッチボールが大事だと伝えて、生徒同士のやりとりは雪合戦のような意見のぶつけ合いになります。自分の教育を振り返り、今回の学びを今後に生かしていくたいと思います。



今回のイベントを通して、平和教育にもいろいろな形があると感じました。中でも印象に残ったのは、個人のストーリーが気持ちに訴えるだけでなく、記憶に残りやすいということ。「一人の死は悲劇だが、大量の死は数字にすぎない」という言葉を思い出し、逆に一人に焦点を当てることで伝わるのだと思った。



閉会後の記念撮影。それぞれが書いた「私にとっての平和」を手に

子どもたちはなぜ 「平和」に関心を持ちにくいのか

今日は、教育に携わるみなさんに、平和教育についてお話ししたいと思います。僕の経験では、日本の子どもたちは、平和への関心があまり高くありません。「平和は美しい言葉です」と彼らは言うけれど、折り鶴を折ったり、広島では8月の登校日に平和集会に参加したりすることを「平和」だと考えている生徒が多い。そして、「私は平和活動家ではないし」とか「平和は自分の将来の成功やお金には関係ないし」などと感じている子も少なくない。教師のみなさんもきっと同じような壁にぶつかったことがあるでしょう。

では、どうすれば子どもたちの関心を引き出し、平和の大切さを伝えることができるのでしょうか。僕は、とくに中高生には、「Dominance & Hierarchy（優位性とヒエラルキー）」の話をするのが効果的だと考えています。クラスの中で一体誰が一番足が速くて、成績が優秀か、誰が野球やサッカーが上手で、喧嘩に強いのか——中高生はそういう序列に非常に敏感です。

今、国際社会ではこのヒエラルキー、つまり

パワーバランスが崩れつつあります。かつて強国だったアメリカやヨーロッパの力は弱まり、中国をはじめアジアの国々が台頭している。アメリカは危機感を募らせ、国際関係は緊張感を増しています。いつの時代も、勢力図が塗り替えられるとき、そこには衝突や暴力が生まれます。これは、チンパンジー オオカミの群れでも同じ。ボスの力が弱くなると、ナンバー2や3がボスを狙って喧嘩をしけ、勝った者が新しいリーダーの座に君臨し、富を手にするんです。

いま、広島では多くの人が、「今は第二次世界大戦の戦後」と捉えています。けれど僕は、「今は第三次世界大戦の戦前」との見方をしています。「すでに第三次世界大戦が始まっている」という人さえいる。ウクライナ ガザ、スーサンにソマリア、コンゴ……世界の状況を見れば、この見方を否定できないでしょう。この戦争を止めるのは、我々の喫緊の課題です。

「もしこのまま競争が激化すれば、第三次世界大戦が起きるかもしれない。『戦争文化』を卒業して『平和文化』を作らなければ、君たちが僕の年齢になる前に人類が滅んでしまう可能性だってある。それでもいいのか？」

少しショッキングに聞こえるかもしれません、77歳の僕が高校生や大学生にそう問いかけると、彼らは真剣に受け止めてくれます。

戦争文化から平和文化へ 平和を考える3つのレベル

戦争文化とは、競争原理に基づいた社会のあり方です。家族であれ企業であれ国家であれ、「誰がボスか」が常に問われる。アメリカの政治を見ればその典型です。トランプ大統領が掲げた「Make America Great Again」は、アメリカこそが世界のボスでなければならないという、まさに戦争文化を象徴するような姿勢です。日本といえば、徳川家康の時代もそう。彼は250年間平和を守ったと言われますが、それは力による平和だったのです。

一方で、平和文化のベースにあるのは協力です。誰かを支配するのではなく、共に生きるために力を合わせる。すべての人も動物や植物も、地球全体が健康であるよう知恵を絞るのも平和文化の特徴です。広島で被爆し、各国で核廃絶を訴え続けた哲学者・森瀧市郎さんが、「力の文明から愛の文明へ」と語りましたが、今までにその転換が求められています。

今の若い世代は、「自分は日本人、あるいはアメリカ人だ」という意識と同時に、「自分は地球人だ」という意識が強いと感じます。だから、地球を守ろうという話になると、素直に耳を傾けてくれます。

子どもたちに話すとき、僕は「平和」を3つのレベルで考えてもらっています。まず1つ目は「自分との平和」。自分は今、ハッピーなのか、怒っているのか、あるいは誰かを憎んでいるのか？ 自分の心と向き合うことです。2つ目は「他人との平和」。例えば家族の中で対立が起きたとき、どうやって解決しているのか。なぜ自分は怒っていて、本当に必要としているものは何かなど、人間関係の中で考える平和です。

そして最後に「自然との平和」。すべての人類がアメリカ人と同じ生活をするためには、地球が5.3個分必要と言われています。私たちが今のままの持続不可能な生活を続ければ、やがて地球は住めない星になってしまうでしょう。競争では気候変動も、海洋プラスチック問題も、核兵器廃絶も、解決できない。すべての人間が話し合い、協力し合って、どうすればこの地球を守れるのかを考えていかなればならない。その前提となるのが平和です。

戦争文化から平和文化へ。 僕たちが「地球人」として できること

日本に暮らす私たちにとって、「平和」はどこか遠い言葉になってはいないでしょうか。元広島平和文化センター理事長のスティーブ・リーパーさんは、世界の分断が進む今こそ、教室を「平和文化を育てる場」にすべきだと語ります。

構成：中村茉莉花



スティーブ・リーパー
Steve Leeper
広島女学院大学客員教授、
元広島平和文化センター理事長

1947年米国イリノイ州生まれ。1歳のときから日米を生活の拠点とし、母親からはガンジーの本をよく読んでもらっていた。1985年、コンサルタントの仕事で日本を訪れ、友だちを訪ねた広島で英語教師を頼まれたことから暮らし始めた。秋葉忠利・前広島市長との出会いがきっかけで、2002年平和市長会議米国代表となり、国連で同会議の広報やネットワークを広げた。2007年4月から2013年まで米国人として初めて同センター理事長に就任。現在も、日米両国を往復して原爆展を開催するなど、平和を訴え続けている。著書に『日本が世界を救う 核をなくすベストシナリオ』(燐葉出版社)など。

教室でできる 「平和づくり」のトレーニング

平和的に物事を決めるというのは、学ばなければいけない技術です。そして平和文化を学ぶ一番の方法は、教室そのものを実験場にすることです。

例えばクラスで口喧嘩や殴り合いなど、対立が起きたとします。以前なら、先生が独裁者のように、「君が悪いから退室しなさい」と一方的に判断していたでしょう。ですが、平和はトップダウンではつくれません。ボトムアップ、つまり平和的な子どもを育てるこことしか実現できない。もちろん暴力が振るわれるなど危険な場面では介入が必要ですが、基本的には子ども自身に解決してもらうことが大切。先生はそのための「仲介役」にすぎません。

大切なのは、当事者だけでなく、周りで見ていた仲間も含めて「誰が先に手を出したのか」「なぜそうなったのか」「誰が何を言ったのか」など、それぞれが見たことや考えたことを共有すること。クラス全員で話し合い、どう解決するかを決めてることです。

ディベートのように勝ち負けをつけないこともポイントです。「どちらが正しいか」ではなく、事実を共に探究し、「どうすればいいか」を皆で考える。最終的に、すべての当事者がイエスと言える解決策を見つけることが、平和文化的な対話です。

こうした経験を通して、子どもたちは相手も同じ人間であり、怒りを感じても話し合えばまた友だちに戻れること、対立を怖がることはないことを理解していくのです。小学1年生からこのトレーニングを始めれば、子どもたちは驚くほど素直に学んでいきます。高学年になるころには、対立が起きてても上手に解決できるようになり、やがて対立が起きること自体も減っていくでしょう。

絶望の先に夜明けがある。 平和をあきらめないで

僕自身も、最初から平和に強い関心を持っていたわけではありません。広島に来てから原爆被害について学ぶ中で、原爆が危険な武器であること、アメリカの原爆投下は戦争犯罪であったことなどを学びました。やがて森瀧市郎さんの娘、春子さんと共に「グローバル・

ピース・メーカーズ・アソシエーション」という市民団体をつくり、98年に核実験を行ったインドとパキスタンの学生を広島に呼ぶなど、平和のための活動は広がっていました。

「平和文化」をつくろうとするとき、今の「戦争文化」はあまりにも強すぎて、政治の世界で戦おうとしてもつぶされてしまうと思うんです。だから、僕は戦わない、協力しない、というやり方を選びます。ガンジーのように、非暴力で、戦争文化に加担しないということです。

東京や大阪などの大都市に暮らす人々は、自分たちのほうが地方より「上」だと思っています。それは、お金があって、お金さえあれば何でも手に入ると思っているからです。でも、仮に外から食料が入ってこなければ、大都市は数日で立ち行かなくなるでしょう。それに比べ、田舎は自分たちの手で食べ物を育て、暮らしていくことができる。そう考えると、大都市と田舎、本当に強いのはどちらでしょうか。答えは、田舎であり、自然是。都会に出るのではなく、平和のために地域に根ざし、田舎の力を強くしていくこと。それも、戦争文化に加担しないひとつの方法です。

日本は世界の中でも信頼され、人気のある国。アメリカや中国の間に立って、対立ではなく平和文化を導くリーダーになれると思います。平和文化リーダーとは命令する人ではなく、「核兵器を廃絶しよう」「戦争をやめよう」「海洋プラスチックをなくそう」と声を上げる存在。それが日本の天命だと僕は思っていますが、残念ながら今の日本はアメリカとの関係が強すぎて、中国を敵視する傾向があります。けれど真の平和文化を築くなら、自らの言葉で世界に働きかけることが大切です。

最後に、教員のみなさんにお伝えしたい言葉があります。「The darkest hour is just before the dawn (夜明け前がいちばん暗い)」。今、世の中は真っ暗闇のように感じられます。でも、もしかしたら夜明けはすぐそこまで来ているのかもしれません。本気で平和について考え、対立を平和的に解決する方法やすべての人が健康で幸せに暮らし、地球を守っていく方法を考えること。その営み自体が「平和文化」なのです。僕もときどき「No hope」だと感じることがありますが、できることから始めないといけません。みなさんも、どうか平和をあきらめないでください。

Information

Think the Earthの本

『未来を変える目標 SDGsアイデアブック 増補改訂版』

発行部数13万部を超えるベストセラーとなり、全国1,000校を超える学校で副教材として採用された『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』が、SDGs採択10年の節目に56ページ増量した増補改訂版として生まれ変わりました。最新のデータに更新したほか、新たに169ターゲット・232指標を加え、SDGs研究の第一人者である慶應義塾大学大学院の蟹江憲史教授による解説「SDGsの現状とビヨンドSDGs」を収録。2030年より先の未来に向けて、地球や地域の課題にどう向き合い、どんな未来を描くのか——。SDGsを“遠い目標”ではなく、“自分の生き方とつながる問い合わせ”として捉えられるよう作られた、読者の学びと行動を支える一冊です。

『あおいほしのあおいうみ』

海をめぐる学びを多角的に扱ったビジュアルブック。谷川俊太郎さんの詩「うみ」と、木内達朗さんによる透明感あふれるイラストが巻頭を飾ります。宇宙と地球、生物多様性、循環、環境と社会、暮らしや仕事、未来と変革——9つの「港」をめぐりながら、海をめぐる物語が広がっていきます。SDGs14「海の豊かさを守ろう」をテーマに制作され、全国約200校で副教材として採用されています。子どもから大人まで、「海を知り、感じ、行動する」ための入口となる本です。ぜひ手に取ってみてください。



定価:2,000円+税
発売:紀伊國屋書店

新刊!



定価:1,800円+税
発売:紀伊國屋書店



そのほかのコンテンツ

ウェブメディア think

Think the Earthのウェブメディアthinkでは、世界各地のリポーターが気になったニュースやオススメ情報を随時発信しています。最近の地球ニュースのタイトルをご紹介します。気になる記事があったらQRコードよりどうぞ！

- ▶ 京都議定書誕生の駆け引きが舞台に イギリスで話題の『KYOTO』が日本で上演へ
- ▶ 映画『タリナイ』が描く歴史教科書に載らない戦争の記憶
- ▶ 上野発、クラフトの個性派ノンアルビールで地域交流
- ▶ 9月21日はピースデー「ザ・ディ・アフター・ピース」で学ぶ平和の“つくり方”
- ▶ 同性パートナーシップ制度開始10年 映画『これから私たち—All Shall Be Well』が問う婚姻の平等とは
- ▶ 使用済みの漁具が“美しい海を守るサステナブルなバッグ”に生まれ変わる



いのちをつなぐ学校

サラヤ株式会社とSDGs for Schoolが推進する教育支援プロジェクト。大阪・関西万博プロデューサーとしても知られる生物学者の福岡伸一校長が監修する衛生・環境・健康がテーマの映像教材を通じて、科学的思考と感性を育てる授業づくりを応援します。

教材ダウンロード

SDGs for Schoolの活動を通じて企業や自治体、大学等と連携により、冊子や映像などの教材が次々に誕生しています。ジャンルは金融、衛生、環境、キャリアなど多彩です。無料ダウンロードできる教材も多数あります。ぜひアクセスしあみてください。



Think the Earth

www.ThinktheEarth.net/jp

一般社団法人 Think the Earth は「エコロジーとエコノミーの共存」をテーマに2001年に発足したNPO（非営利団体）です。クリエイティビティやコミュニケーションの力で、日常生活のなかで地球や世界との関わりについて考え、行動する、きっかけづくりを行っています。

環境や社会問題への無関心とあきらめの心こそ最大の課題ととらえ、ウェブサイトや書籍などで情報発信を行っているほか、企業やNPO、教育者、クリエイターとともに誰もが参加できるプロジェクトを開発・提供しています。

2025年度パートナー企業(2025.11.30現在 五十音順)

Think the Earthの活動は以下の企業の協賛・協力により推進しています。

アクティオ株式会社 サラヤ株式会社 野村不動産ホールディングス株式会社 不二製油株式会社
株式会社横浜銀行 LINEヤフー株式会社 株式会社LIXIL

ティーチャーズ・ギャザリング2025 in 広島の開催、およびThink the Earth Paper vol.18「SDGs16 平和をあきらめない教育を」の刊行にあたってクラウドファンディングサービス「For Good!」を通じて資金を募り、下記のみなさまからご支援をいただきました。心より感謝いたします。

東庸介 熊谷てるみ 櫻田彩子 山藤旅聞 須賀智子 竹内慎一 辰野まどか 高橋真理子 Tetsuhiro Otsuka 中田路実
西村吉史 廣谷明人 堀田新五郎 淵上英敏 水野誠一 宮田至康 宮田昌尚 三森たかし 築瀬千詠 8☆ 株式会社バズル
株式会社フープ ほか計52名

情報発信とコミュニティ

個人会員、メールニュース、SNSなどさまざまな入り口でご参加をお待ちしています！

アース
コミュニケーター



メールニュース
登録



ティーチャー⁺
登録



発行●一般社団法人 Think the Earth

発行日●2025年12月9日

編集・写真●上田壮一 笹尾実和子 制作●重松直子
デザイン●武田英志(hoop) 印刷●株式会社瞬報社

Think the Earth Paper PDF版（カラー）
バックナンバーも下記ウェブサイトにて閲覧できます。
<http://www.thinktheearth.net/jp/ttepaper/>

